

義父と関係を持つようになってからどのくらい経っただろう。不在がちな夫の留守のたびに体を重ね、今では夫よりも体が馴染む関係になった。

「お義父様、夫が出張で明日から不在で。……ええ♡また、一週間ほど……はい♡お待ちしております♡♡」

電話を切るなり、私は一週間分の食料をネットスーパーで買い込んだ。もちろん、夫の不在の間中ずっと家にこもることができるようだ。

翌朝、夫を笑顔で送り出すと、私は急いで寝室のクローゼットの前に向かった。引き出しの奥にしまったいくつかのランジェリーを取り出し、裸になる。

（どれにしよう……♡）

ドキドキと胸を高鳴らせながら、ランジェリーを体の前にあてた。

総レースのＴバック、股の部分に切り込みが入ったピンク色の
ショーツ……

（お義父さまはどんな下着が好みだろう♡♡）

きっと、どんな下着を着けていても褒めてくれるに違いない。義父
からの甘い言葉と愛撫を思い浮かべ、待ち切れない気持ちになる。

（ああ……早くお義父様の手に触れられたい♡♡）

今日からの一週間に思いを馳せると触ってもいない股の間がジュン
♡と潤んだ。

ひとしきり悩み、股の部分にパールがついたショーツと、乳首の部
分が開いたベビードールを身につけ、鏡の前に立った。白いレースか
ら透ける体と、股の間に走っているパールがなんともいやらしい。

一歩足を踏みだすと、冷たい数珠状のパールがぬるついた部分に食
い込んだ。

「あっ♡」

思わず腰をくねらせた自分の姿が目に入り、頬を赤くする。これ以上こうしては、一人で気持ちよくなってしまいそうだ。慌ててワンピースを纏う。そうこうしていたところで、ちょうど玄関のチャイムが鳴った。

「いらっしやいませ♡」

胸を高鳴らせながら玄関へと向かう。扉を開けると、義父は紳士然とした穏やかな笑顔で頷いた。

「元気そうだね」

「ええ……♡」

うつとりと目の前の義父を眺める。ロマンスグレーの髪は綺麗に整えられ、衰えを知らぬ体は厚く鍛え上げられている。

「お義父様はお変わりございませんか？」

「ああ、おかげさまでね」

扉を閉めると同時に、義父が玄関にしっかりと鍵をかけるのを息を呑んで見守る。

「……君に会いたかったよ」

そう言うとき義父は玄関で熱く私を抱きしめた。

「お義父様♡」

すぐに唇を吸われ、体をまさぐられる。

「んっ……♡♡♡」

そのまま上り框の上に押し倒され、服の上から胸を揉みしだかれた。

「ああん♡♡♡」

「すぐにそんなエッチな声を出すとは。なんて淫乱な体なんだ」

「そ、そんな……♡♡」

「そんなこと、あるだろう。おや、君、ブラジャーを着けていないのかね」

すでにピンと勃起上がって存在を主張する乳首を布地越しに「コリコリ」と義父が摘む。

「そんなこと……ここで言わないでください♡いつ、ご近所様が来るか……♡♡」

「下着を着けていない君がイケナイだろう」

「そ、そんな……♡♡」

義父を止めようとして体をよじるが、頑健な体はびくともしない。

「あ♡お義父様のも……」

ゴリ、と股を擦り上げたその部分に体をビクリと揺らす。義父の立派なその場所はすでに固く勃起あがっていた。

ゴリ♡ゴリ♡♡ゴリ♡♡♡

固くなったその部分が股にゴリゴリと擦りつけられ、パールがおまんこを直に刺激する。

「んっ、あ♡あ♡♡」

「ああ……なんて可愛いんだ。会いたかったよ。君も私を待っていてくれただろう？」

「それは、もちろんです♡♡♡」

服越しに義父が私の股に手を伸ばす。すると、コリツとしたパールの硬い感触にすぐに気付いたのだらう。

「む、なんだねこれは」

コリ♡コリ♡コリ♡♡♡♡♡

義父の手がパールをくりくりと弄った。

「あ♡あ♡いやっ♡」

「いやじゃないだらう」

「あ♡良い、良い……です♡お義父様♡♡♡」

体を抱き寄せられ、薄手のワンピースの柔らかな生地越しに股をぐりぐりと刺激される。すぐにその部分から透明な液が溢れ出し、布地を濡らした。

「あんっ♡お義父様あ♡♡♡」

服の上から濡れた恥丘をクニクニと揉まれ、どんどん息が上がつていく。

「あ♡あ♡」

「こんなにエッチな下着を着けて、私を待っているとは」

「だって……お義父様にすぐにして欲しくて♡♡♡」

上目遣いで義父を見つめた。

「ああ……君はなんて素直で可愛いんだ。めいっばい可愛がってやるからな」

「ああん♡ありがとうございます♡♡お義父さまあ♡♡」

胸をワシワシと揉みながら、パールをぐりぐりと動かす義父の手技にすでに絶頂が近づいている。

「あ、あ♡♡ おとうさま、もう駄目です♡♡」

義父の目がぎらりと光った。

「このままいきなさい」

「あ、あ、そんな♡♡ 良い♡♡ いい♡♡ イく、いく、イツちゃうう

♡♡♡ おとうさまあ——♡♡♡」

玄関の固い床の上でイカされ、身を振る。

「……はあ♡♡ はあ♡♡ はあ♡♡♡♡♡」

絶頂したばかりの体をビクビクと揺らしながら、うつとりと義父を見上げた。

「おと…さま……♡♡♡」

頬を紅潮させた私を義父が優しい笑みで見下ろす。

「上手にイケて偉いぞ○○○」

義父は私を褒め、まだ息が整わない体を易々と持ち上げた。

「あんっ♡♡♡」

「さあ、寝室に行こう」

強靱な肉体を持つ義父の手によって、お姫様抱っこで二階の寝室に運ばれる。そうして、当然のように夫と使うキングサイズのベッドに寝かされた。微かな罪悪感と背徳感は、これからもたらされるであろう快楽への期待感にすぐに押し流される。

「さあ、ここで一週間君をたっぷり愛してやるからな」

義父の手が躊躇なく私のワンピースのファスナーを降ろした。そうして、服の中から現れたベビードールとパールのシヨーツ姿の私に、義父は嬉しそうに微笑んだ。

「なんて綺麗なんだ……。こんなエッチな下着をつけて私を待っていたのかい」

「はい……♡♡♡」

ベビードールからツンと顔を覗かせた乳首は先ほどの愛撫ですでにしっかりと固く勃ち上がっている。シヨーツのパールは股の間に食い込み、漏れ出した愛液でびかびかと光っていた。

「ああ、どこもかしこもなんて美味しそうなんだ君は」

あまりの気持ちよさに太ももを擦り合わせると、股の間をパールが刺激した。

「あ♡あ♡あ♡あ♡あ♡あ♡」

「おやおや、真珠がおまんこにこんなに食い込んで。手も使わずにオナニーするとは、なんてエッチな子だ」

「だ、だってえ♡♡♡」

「私の手は要らないようだね」

「そ、そんなこと♡」

「おまんこが美味しそうに真珠を食べているじゃないか。どれ、今度は手を使わずにイッてごらんさい」

「そ、そんな……♡♡」

じっと見守る義父の前で、もじもじと脚を擦り合わせる。義父のペニスはずでにストラックスを持ち上げ、大きなテントを作っている。

（ああ、お義父様のペニスが欲しい♡♡）

熱い目で見つめながら、股を擦り合わせた。自ら乳首に手を伸ばし、シーツの上で身悶える。

「あ、あ、お義父様、早く……♡早く触って欲しいです♡♡」

股の間から溢れ出した愛液が、シーツの下の吸水シートに吸い込まれていく。

「あ、あん♡♡♡あ♡おねが……します♡♡♡♡」

しかし、どんなに訴えても義父は体に触れてくれない。仕方なく、言われた通り手を使わずにひたすらおまんこの肉だけでムギムギとパールを食み、感触を味わう。

「いい、いい♡♡♡良いけど……これだけじゃ……♡」

身悶えながらも義父をジッと見つめ、視線を絡ませ合う。シーツの上でゆさゆさと体を揺らし、クリトリスやおまんこを刺激し続け、ようやくじわりとした甘い心地良さが体に広がった。

「ん……♡♡♡おとうさま……♡♡♡♡」

「ちゃんとイったか」

「はい……♡♡ちゃんとイけました♡」

やっとイケた安堵感とともに頷く。

「良い子だ」

頭を撫でられ、絶頂したばかりの体が喜びに震える。

「良い子にはご褒美をあげよう」

そう言うとき義父はスラックスの前をくつろげ、しっかりと上を向いて立ち上がった。ペニスを取り出した。血管を浮き立たせた太い竿にぐくりと息を飲む。久しぶりの義父のペニスはやはり、立派で猛々しい。

「お義父様……早く欲しいです♡♡」

パールをずらし、おまんこのびらびらを両手で開き、脚をカエルのように開く。

「○○……上手に誘えて偉いぞ。すぐにお前のおまんこをおちんぽでいっぱいにしてやるからな」

そう言うとき義父は膣口におちんぽを押し当てた。

「ああん♡おつき♡♡」

圧迫感にギュッと目を瞑ると、義父は私の体を愛おしげに撫でた。

「おおかわいそうに。やはりいきなりは苦しいだろう。おっぱいとクリトリスも一緒に触ってやるからな。さあ、私のおちんぽを受け入れなさい」

「あん♡おっぱいもクリも好き♡♡おとうさま、お願いします♡♡」

乳首とクリトリスをそれぞれ親指と人差し指でシコシコと扱かれると、徐々に膣口が緩んでくる。その瞬間、義父は間髪を置かず丸く大きな亀頭を押し込んだ。

「いあん♡♡♡」

亀頭を飲み込んだばかりのおまんこに、ズリズリと強大な竿が挿し込まれていく。

「ああああん♡♡♡」

極太のおちんぽが膣壁の気持ち良い場所をまんべんなく擦った。

どチュン♡♡♡♡♡

奥を突かれ、あっ♡♡♡♡と声を上げる。

「一番奥まで入ったな」

「はい♡♡♡」

同時に——待ち切れなかったのだろう——義父は容赦なく激しく腰を打ちつけ始めた。

パン♡♡パン♡♡パン♡♡パン♡♡パン♡♡パン♡♡パン♡♡パン♡♡パン♡♡パン♡♡パン♡♡

♡♡♡♡♡

「あああああ♡♡♡♡♡いい……あああああ♡♡♡♡♡」

「ああん、おとうさまあ♡♡♡」

精子を塗り込むように腰を動かされ、絶えず喘ぎ声が漏れる。

「可愛い、可愛いぞ○○」

「おとうさま…♡♡♡良い♡♡♡すごく気持ち良いです♡♡♡」

「もっと良くしてやろう」

そう言うとき義父は、繋がったままの体を抱き起こし、駅弁の体勢で私を持ち上げた。

「……あ♡お義父様♡?」

姿見の前まで私を連れて行くと、床の上に降ろし、ゆっくりと結合を解く。ツ……♡とおまんこから溢れ出した精液が太ももを伝った。

「見てごらん」

戸惑う私の背後に義父が立ち、今度は立ちバックの姿勢で後ろからペニスを受け入れさせられる。

「ふ、ああああああ♡♡♡♡♡」

いきなり挿入され、混乱する体を義父がバックハグする。ついでに両手で乳をギュツと揉まれた。

♡♡♡
モニユ♡♡モニユ♡…パンツ♡♡パンツ♡♡パンツ♡♡パンツ♡♡パンツ

「ほら、見てみなさい」

「え？♡♡♡♡」

姿見には、義父のおちんぽを受け入れて全身を紅潮させ快感に身悶える私が映っていた。

「え♡♡♡こ、こんな…恥ずかしいです♡♡♡」

「恥ずかしがらずに見てごらん。君の可愛いおまんこが私の大きなペニスをいっぱい頬張っているよ」

「いやあ…♡♡おとう様…♡」

「恥ずかしがることはない。とても綺麗だよ。ほら、もうちょつと深く出し入れてやろうか」

ズチュン♡ズチュン♡と義父の凶悪なペニスが入りを繰り返す。

「ふふ……たくさん愛液が溢れてくるな。○○の愛液で私のペニスは濡れ濡れだ」

義父の言葉通り、溢れ出す愛液がヌチャヌチャといやらしい音を立て、義父のおちんぽを濡らしている。

「そんな……♡言わないで……♡♡」

「こんなに美しい体の何を恥ずかしがっているんだい……おっぱいは大きくて腰はくびれていて……真っ白なふわふわの体が私のペニスを飲み込んでいる……」

そう言っただけで義父はズチュ♡ズチュ♡と腰を揺らした。

「は♡♡あ、あ、あ♡♡♡♡」

「気持ちいいかい？」

「……はい♡♡」

「良い子だ。どれ、もっと深くしてやろう」

「え……？もつと……？♡♡♡」

義父が私の腕を掴み体を引き寄せる。義父の下生えがお尻に当たり、こそばゆくも気持ち良い。

「ああん♡♡♡」

仕上げとばかりに、義父は中に入ったペニスをさらにギュウと奥へと押し込んだ。体が持ち上がり、爪先立ちになる。

ズチュン♡♡♡

子宮の奥までミチミチに満たされ、お腹がぼこりと膨れた。

(すごい……お義父さまのおちんちん……♡♡どれだけ大きいんだろ
う♡♡)

「そ、そんな♡♡ そんな奥まで来たら……♡♡」

「赤ちゃんのお部屋に直接届いてしまうな」

震える顎で何度も頷く。

「○○の赤ちゃんのお部屋に私の子種を直接注いでやろう」

「そ、そんな……♡♡」

「欲しいだろう？」

「……はい……♡♡♡」

ドチュン♡ドチュン♡♡ドチュン♡♡ドチュン♡♡

重たいピストンで何度も何度も最奥を拓かれて、身体中の細胞が歓喜する。

「気持ちいい♡気持ちいい♡♡♡」

まわらない舌でつたえると、義父は嬉しそうに私の顎を掴み唇を重ねた。

ズリユツ♡♡ズリユ……♡♡♡レロレロレロ♡♡♡♡♡

口の中を動き回る舌に陶然とする。

「ふあっ♡♡お義父さまあ…♡」

うっとりとうと喘ぐと、義父はグラインドするように腰を前後し奥へ奥へとペニスを押し付けた。

「ああん♡♡♡」

「可愛い、可愛いな○○…どれ、おっぱいもしっかり揉んでやる」

腕を掴んでいた手が胸の前に伸ばされ、乳房を鷲掴まれる。節だった男らしい指が柔らかい乳房に沈み込み、親指と人差し指で器用にくりくりと先端をつまんで揺すぶられる。

「あっ…♡♡♡おっぱい好き♡♡♡」

くすんだピンク色の乳首がピンと勃起上がり、もっと触ってほしいとでも言うように義父の手のひらに吸い付く。

「なんてエッチなおっぱいなんだ…こんなおっぱいで普段はどうしているんだ。男に触って欲しくて持て余しているんだろう」

「そんな♡」

「誰彼かまわず誘っているんじゃないだろうな……男の配達員やセー
ルスが来たらどうしているんだ」

「…っ♡な、なにも……♡」

実は、最近配送担当になった若い男性に舐めるような視線で体を見
られたことは黙っていた。

「こんな美しい体をしていたら、男が変な気を起こさないほうが無理
なんだ……君はそのことを心に留めておきなさい」

「は、はい…♡お義父様……♡♡」

言いながら、頭の中で配達員さんに触られることを想像してしま
い、思わず腰が揺れる。

「む……注意したばかりだというのに……いけない子だ」

「あ、お義父様……なにを……♡」

「君はもっと危機感を持ちなさい」

こんなに落ち着いた義父でも嫉妬をすることがあるのだろうか。その日の義父はとくに私を責め立てることに執着し、私たちが眠りについたのは夜遅くなってからだった。